



『論語正義』 訳注：「顔淵篇第十二」 (一)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平木, 康平 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00004562">https://doi.org/10.24729/00004562</a>

## 『論語正義』 訳注

— 「顔淵篇第十二」 (一) —

平木康平

本稿は、清の劉寶楠(二七九〇—一八五五)が著した『論語正義』の訳註である。

本訳註は、本田濟・神楽岡昌俊・衣笠勝美・山口澄子の各氏と平木康平とで会読した成果である。山口氏の草稿に、平木が補正を加えたもので、文責は平木にある。

すでに「先進篇第十一」(一)は、「大阪青山短期大学研究紀要第二十三号」(平成九年三月)に、「先進篇第十一」(二)は、「大阪青山短大国文第十三号」(平成九年二月)に、「先進篇第十一」(三)は、「人文学論集第十六集」(大阪府立大学人文学会、平成十年一月)に、「先進篇第十一」(四)は、「大阪府立大学紀要 人文・社会科学第四六卷」(平成十年三月)に、それぞれ掲載された。本稿は、その後を承けるものである。

## 凡例

- 一 原文は南菁書院本(『皇清經解』所収)を底本とした。
- 一 『論語』本文の字体は原則として、底本の通りとした。
- 一 訳文・注では常用漢字体を使用した。
- 一 「何晏・劉寶楠解」は両者の説に基づいて『論語』本文を訓読したもの。両者の解釈が異なる場合は、それぞれに一項を立てた。
- 一 『正義』に引用されている文の中で、典拠が示されていないものは出来るだけ出典を明らかにし、( )の中に示した。
- 一 『正義』に引用されている文の中で、典拠の書名や篇名が通行本と異なる場合や、不足する場合は、( )の中に示した。
- 一 引用文中の文字の異同は、明らかな誤字や解釈に支障を来たすものを除いて割愛した。

- 一 原文は適宜区切り、段落分けを行った。
- 一 注は本文中に\*印を付し、各章の後に記した。
- 一 簡単な注は訳文中に( )を用いて記した。

『皇清經解續編』卷千六十五 南菁書院

『論語正義』十五 寶應・劉寶楠楚楨著

『顏淵』第十二 集解

凡二十四章

『劉寶楠解』凡て二十四章。

「正義」に曰く、『經典』釋文」に云ふ、「子路無宿諾」、或ひは此を分ちて別章と爲す」と。

## 第一章

『論語本文』顏淵問仁。子曰、克己復禮爲仁。

〔何晏解〕顏淵仁を問ふ。子曰く、己を克つひみて禮に復るを仁と爲す。

〔劉寶楠解〕顏淵仁を問ふ。子曰く、己を克つひみ禮を復かみて仁を爲す。

〔注〕馬(融)曰く、克己とは身を約するなり。孔(安國)曰く、復は反なり。身能く禮に反れば、則ち仁爲るなり。

〔論語本文〕一日克己復禮、天下歸仁焉。

〔何晏解〕一日己を克みて禮に復れば、天下仁に歸す。

〔劉寶楠解〕一日己を克みて禮を復めば、天下仁に歸す。

〔注〕馬曰く、一日すら猶ほ歸せらる。況んや終身をや。

〔論語本文〕爲仁由己。而由人乎哉。

〔何晏・劉寶楠解〕仁を爲すは己に由る。而して人に由らんや。

〔注〕 孔曰く、善を行ふは己に在りて、人に在らざるなり。

「正義」に曰く、「克」、皇(侃)本「剋」に作る(皇侃義疏懷德堂本は「剋」に作る)。

「己を克しみて禮を復む」とは、仁を爲す所以なり。「爲」は猶ほ事のごときなり。力を仁に用ふるを謂ふなり。下の句の「仁を爲す己に由る」も、義同じ。

『春秋』左(氏傳)「昭(公)十二年」の傳に言ふ、「楚の右尹の子革、靈王を諷するに、『折招の詩』を以てす。王揖して入る。饋するも食らはず、寢ぬるも寐ねず。自ら克くする能はずして、以て難に及ぶ。仲尼曰く、『古や志有り。克已復禮、仁なりと。信に善きかな。楚の靈王、若し能く是くの如くんば、豈に其れ乾谿に辱しめられんや』と。是れ「克已復禮爲仁」とは、乃ち古の成語にして、夫子之を引く。

「一日己を克しみて禮を復めば、天下仁に歸す」とは、言ふところは、己誠仁を爲さば、人必ず之を知らん。故に能く仁を己に歸し、名を成すを得るなり。「天下」と言ふは、之を大にするなり。

毛氏奇齡『論語稽求篇』に、「禮記」哀公問に、「百姓之に名を歸して、之を君子の子と謂ふ」と。則ち「歸」は亦た祇だ是れ名謂の義なり(\*1)。先教論(\*2)云ふ、「漢の長安令の

楊興史高に説くに、「將軍誠に幕府に召置すれば、學士仁に歸す」と。『後漢(書)』和帝(紀)に、「皇太后の詔に『大尉の彪、海内仁に歸す。墨賢の首爲り』」と。言ふこと甚だ夸大なるも、僭悻を嫌はざるは、祇だ名を稱するのみなればなり」と。

今案ずるに、『漢書』王莽傳贊に、「宗族孝と稱し、師友仁に歸す」と。『後漢書』郎傳に、「昔顔子十八にして、天下仁に歸す」と。並びに「仁に歸す」るを以て、仁と稱せらるると爲す。

『禮記』禮器に云ふ、「故に君子禮有れば、則ち外に諧かなひて内に怨み無し。故に物として仁に懷なつかざる無く、鬼神徳を饗く」と。鄭(玄)注は、「仁に懷く」を以て、即ち仁に歸すとす。懷・歸並びに稱くと訓ずるなり。

注の「克己」より「仁矣」に至るまで。

「正義」に曰く、『爾雅』釋詁に、「克は勝なり(爾雅原文「剋」字に作る)」と。又た「勝は克なり」と。轉じて相訓ず。此に「約」と訓ずるは、引申の義なり。顔子言ふ、「夫子は我を博むるに文を以てし、我を約するに禮を以てす」と(子罕)。約とは約束の約の如し。身を約すとは、猶ほ身を修むと言ふがごときなり。

『後漢書』「安帝紀」に、「夙夜己を克み、憂心京京たり」と。

〔同〕「鄧皇后紀」に、「同列に接撫し、常に己を克みて以て之に下る」と。〔同〕「祭遵傳」に、「己を克みて公に奉ず」と。〔同〕「何敞傳」に、「宜しく當に己を克みて、以て四海の心に醜めべし」と。凡て「己を克む」と言ひて、皆な身を約すとこれ訓するが如し。

〔法言〕「問神」に謂ふ、「己の私に勝つ、之を克と謂ふ」と。此も又た一義なり。劉炫授きて以て「左傳」（「昭公十二年」）の「克己復禮」の文意を解し、楚の靈王の嗜慾多く、功伐を誇るを指して言ふとす（\*3）。乃ち邢（昺）疏は即ち授きて以て「論語」を解す（\*4）。『朱子集注』も又た直だ己を訓じて私と爲す（\*5）。並びに之を失せり。

「復は反なり」とは、反は猶ほ歸のごときなり。吾將に視聽言動する所有りて、先づ禮に反らんとす。之を復禮と謂ふ。己先に私有り、己先に禮無くして、此に至りて乃ち復すと謂ふには非ざるなり。

〔論語本文〕顏淵曰、請、問其目。

〔何晏・劉寶楠解〕顏淵曰く、請ふ、其の目を問はん。

〔注〕包（咸）曰く、其の必ず條目有るを知る。故に請ひて之を問はんとするなり。

〔論語本文〕子曰、非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動。

〔何晏・劉寶楠解〕子曰く、禮に非ざれば視ること勿かれ、禮に非ざれば聽くこと勿かれ、禮に非ざれば言ふこと勿かれ、禮に非ざれば動くこと勿かれ。

〔注〕鄭（玄）曰く、此の四者は克己復禮の目なり。

〔論語本文〕顏淵曰、回雖不敏、請、事斯語矣。

〔何晏・劉寶楠解〕顏淵曰く、回不敏なりと雖も、請ふ、斯の語を事とせん。

〔注〕王（肅）曰く、敬しみて此の語を事とし、必ず之を行はんとするなり。

〔正義〕に曰く、「勿」とは禁止の辭なり。視聽言動は皆な己に

在りて、人に在らず。故に仁を爲すは己に由りて、人に由らざるなり。

「動」とは猶ほ行のごときなり。行ふ所の事を謂ふなり。「禮(記)」  
「中庸」に云ふ、「齊明盛服して、禮に非ざれば動かす。身を修む  
る所以なり」と。蓋し視聽言動には、古人 皆な禮以て之を制する  
有り。「曲禮」「少儀」「内則」の諸篇、及び賈子(賈誼)「新書」「容  
經」載する所の若きは、皆な是れ其の禮にして、唯だ能く己を克み  
て禮を復むのみ。凡そ禮に非ざるの事にして、吾に接する所の者は、  
自ら能く吾の目を制するを以て視る勿く、吾の耳を制するをもて聽  
く勿く、吾の口を制するをもて言ふ勿く、吾の心を制するをもて行  
ふ勿きこと有り。所謂己を克みて禮を復むとは此の如し。

『春秋繁露』「天道施篇」に、「夫れ禮は情を體して亂を防ぐ者  
なり。民の情は其の欲を制する能はざるも、之をして禮に度りて、  
目は正色を視、耳は正聲を聽き、口は正味を食らひ、身は正道を行  
はしむ。之が情を奪ふには非ず。其の情を安んずる所以なり」と。

〔國語〕「周語(下)」に、「單子 晉侯の事を論じて曰く、『歩  
言視聽、必ず皆な論無くんば、則ち以て徳を知るべし。視ること  
遠ければ、日び其の義を絶ち、足むこと高ければ、日び其の徳を棄て、  
言ふこと爽へば、日び其の信に反し、聽くこと淫なれば、日び其の  
名を離る。夫れ目は以て義に處り、足は以て徳を踐み、口は以て信  
を庇ひ、耳は以て名を聽く。故に慎まざるべからざるなり』」と。

然らば則ち視聽言動は、古人 皆な慎みを致すの所に於て、以て  
勉めて徳行を成し、不仁者をして其の身に加へしめざるなり(「里  
仁」)。

〔禮記〕「樂記」に云ふ、「是の故に君子は情に反りて以て其  
の志を和し、類に比して以て其の行を成す。姦聲亂色は、聰明に留  
めず。淫樂愚禮は、心術に接せず。惰慢邪僻の氣は、身體に設けず。  
耳目鼻口心知百體をして、皆な順正に由らしめ以て其の義を行ふ」と。  
即ち此の文の嚴むる所の非禮の諸事なり。

注の「知其必有條目。故請問之」。

〔正義〕に曰く、「目」とは人目の識別する所有るが如きなり。  
凡そ事を行ふには、總要を擧擧す、之を目と謂ふ。注に條目と言ふは、  
一目に止まるには非ず。當に細數有るべきこと、木の枝條の若きなり。  
古人 學を爲むるには、皆な數記有り。循習に備へ、遺忘を戒むる  
所以なり。故に此の注に條目と言へば、必ず之れ有るを知るなり。  
鄭注〔周禮〕「審人」疏引く云ふ、「其の要を知らんと欲す。  
顔回 意に以へらく、禮に三百三千有りて、卒に周ねく備へ難し。  
故に請ひて其の目を問ふなり」と。是れ目とは事の要爲り。

〔周官〕「審人」に、「四に曰く巫目」と。注に云ふ、「目とは事

衆くして其の要の當たる所を筮うらなふを謂ふなり」と。亦た目を訓じて要と爲す。

\* 1 「禮記」「哀公問」の孔穎達正義には「百姓歸之、名謂之君子之子」者、言己若能敬身則百姓歸己善、名謂己爲君子所生之子。(「百姓之に歸して、名謂之君子之子」とは、言ふところは己若し能く身を敬めば、則ち百姓己が善に歸して、名づけて己は君子生ずる所の子爲りと謂ふ)といい、「歸」字を帰服するの意ととる。一方毛奇齡は「歸」字を「名謂」の意にとる。

\* 2 先教論とは、劉寶楠の從父・劉台拱のことをいう。ただし台拱の『論語駢枝』には当該箇所は見あたらない。

\* 3 『左傳』「昭公十二年」の孔穎達正義に引く劉炫の説は以下の通り。「劉炫云ふ、克は勝と訓ずるなり。己とは身を謂ふなり。嗜慾有れば當に禮義を以て之を齊ふべし。嗜慾と禮義と交ごも戦ひ、禮義をして其の嗜慾に勝たしむれば、身は禮に歸り復するを得。是くの如くんば、乃ち仁爲るなり。復は反なり。言ふところは情嗜慾の逼る所と爲りて、己禮を離

るれば、更めて之に歸り復る(原文「劉炫云、克訓勝也。己謂身也。有嗜慾當以禮義齊之。嗜慾與禮義交戰、使禮義勝其嗜慾、身得歸復於禮。如是、乃爲仁也。復反也。言情爲嗜慾所逼、己離禮、而更歸復」。劉炫は隋人。「隋書」卷七十五に伝あり。杜預の説にことごとく反駁を加えている。

\* 4 「論語正義」(邢昺)には、右の劉炫の説をそのまま引いている。

\* 5 朱子『論語集註』には、「克、勝也。己謂身之私欲也」という。

## 第二章

〔論語本文〕仲弓問仁。子曰、出門如見大賓、使民如承大祭。

〔何晏・劉寶楠解〕仲弓 仁を問ふ。子曰く、門を出でては大賓を見るが如く、民を使ふには大祭に承つかふるが如くす。

〔注〕 孔曰く、仁を爲すの道、敬より尚きは莫し。

〔論語本文〕 己所不欲、勿施於人。在邦無怨、在家無怨。

〔何晏・劉寶楠解〕 己の欲せざる所は、人に施すこと勿かれ。邦に

在りても怨み無く、家に在りても怨み無からんと。

〔注〕 包曰く、邦に在るとは諸侯爲り。家に在るとは卿大夫爲り。

〔論語本文〕 仲弓曰、雍雖不敏、請、事斯語矣。

〔何晏・劉寶楠解〕 仲弓曰く、雍不敏なりと雖も、請ふ、斯の語を事とせん。

〔正義〕 に曰く、『史記』「弟子(列)傳」は「仲弓問政」に作る。

馮氏登府『論語異文考證』(未見) は以て『古論』と爲す。然れども前後の章は皆な是れ仁を問へば、應に此のみ政を問ふと爲すべからず。『史記』誤るなり。

「門を出づ」とは大門を出でて、人と相接晤する時を謂ふなり。「大

賓に見ゆるが如し」とは、「見」とは往きて賓を迎ふるを謂ふなり。賓は位己より尊し。故に大と稱するなり。凡そ賓を迎ふるの禮は、賓の等を降る者には門内に於てし、賓の敵ふ者、或ひは尊者には、皆を門外に於てす。此に「門を出づ」と言ひ、又た「大賓」と言ふ。故に是れ己より尊きを知るなり。

「承」とは、『說文』(手部)に云ふ、「承は奉なり。受なり」と。

「大賓に承ふるが如く」、「大祭に承ふるが如し」とは、言ふところは仁者能く人を敬畏す。故に能く人を愛するなり。『左傳』「僖(公)三十三年」傳に、「晉の臼季曰く、臣之を聞けり。門を出ては賓の如くし、事に承ふれば祭の如くするは、仁の則なり」と。亦た古にも此の語有り。而して臼季及び夫子之を引く。『左傳』には「事に承ふ」と言ひ、此には「民を使ふ」と言ひ、文略は同じからず。

「施」とは猶ほ加のごときなり。『韓詩外傳』に、「己饑寒を惡めば、則ち天下の衣食を欲するを知るなり。己勞苦を惡めば、則ち天下の安佚を欲するを知るなり。己衰乏を惡めば、則ち天下の富足を欲するを知るなり。此の三者を知るは、聖王の席を降らずして天下を匡す所以なり。故に君子の道は思想のみ」と。『外傳』の此の言に由りて之を觀れば、「己の欲せざる所人に施す無く」んば、則ち己の欲する所必ず又た當に諸を人に施すべし。故に『孟子』(「離

妻」上)に言ふ、「仁者民の心を得るに道有り。欲する所は之が與に之を聚む。惡む所は施す勿きのみなり」と。是なり。

「翟氏灑」(四書)考異」に、「管子」小問篇」に「論語」を引きて曰く、「其の欲する所に非ざれば、人に施す勿かれ。仁なり」と。是の「施す勿れ」の二句も亦た古語なり。「邦に在り」とは諸侯の邦に仕ふるを謂ひ、「家に在り」とは卿大夫の家に仕ふるを謂ふなり。下篇(「顔淵」)を觀るに、子張士を問ひ、夫子告ぐるに邦に在り家に在るを以てす。證すべし。包注の「邦に在る」を以て諸侯を指すとし、「家に在る」を卿大夫を指すとすは、之を失せり。「邦に在りても家に在りても怨み無し」とは、言ふところは、仁者人を愛す。故に人も亦た之を愛し、復た怨むべきこと無きなり」と。

### 第三章

〔論語本文〕司馬牛問仁。子曰、仁者其言也訥。

〔何晏・劉寶補解〕司馬牛仁を問ふ。子曰く、仁者は其の言や訥。

〔注〕孔曰く、訥は難なり。牛は宋人、弟子の司馬犁なり。

〔論語本文〕曰、其言也訥、斯謂之仁矣乎。子曰、爲之難、言之得無訥乎。

〔何晏・劉寶補解〕曰く、其の言や訥なれば、斯れ之を仁と謂ふかと。子曰く、之を爲すこと難し、之を言ひて訥なる無きを得んや。

〔注〕孔曰く、仁を行ふこと難し。仁を言ふも亦た難からざるを得ず。

「正義」に曰く、「釋文」に曰く、「訥、或ひは初に作る」と。案ずるに、初は是れ段借の字。「汗簡」(未見)は「古論」を引きて初に作る。鄭注(「經典釋文」引く)に云ふ、「訥とは言ふに忍びざるなり」と。此の注は文備はらずして、其の義を曉らかにする莫し。

包氏慎言「温故録」(\*)に、「公羊」宣(公)八年(正義原文「七年」に誤る)冬十月己丑、「我が小君頃熊を葬らんとするに、雨ふりて克く葬らず。庚寅日中して、克く葬る」と。「傳」に、「而」とは何ぞや。難きなり。乃とは何ぞや。難きなり。曷爲れぞ或ひは而と言ひ、或ひは乃と言ふか。乃は而よりも難きなり」と。

(何休)注に、「孔子曰く、「其の之を爲すや難くして、之を言ふに

訥無きを得んや」と。皆な孝子の情より起る所以なり」と。

案ずるに何氏の意に依れば、訥とは其の辭の委曲にして煩重なるを謂ふが似し。心に忍びざる所有りて、逕ちに其の情を逐ぐる能はず。故に之を言ひて亦た重難多しと。鄭注に云ふ、「訥は言ふに忍びざるなり」と。説は何氏に同じ。

牛の兄桓魋宋の景公に寵有り。而れども害を公に爲す。牛之を憂ひて、情辭に見はる。兄弟怡怡たるも、義を以て恩を傷らざるなり。而るに魋の不共、上は則ち國に禍し、下は則ち族を絶つを致す。

之が弟爲る者、必ず須く涕泣して追ふべし。徐達明(徐彦)「公羊」疏は「論語」を申解して云ふ、「言ひ難きの事を言ふには、必ず須く訥にして之を言ふべし」と。蓋し「訥にして言ふ」とは、正に其の忍びざるの情を致す所以なり。故に夫子以て仁と爲す」と。

案ずるに包説或ひは鄭義を得たり。若し然らば、則ち「之を爲す」とは、猶ほ之に處すと言ふがごときなり。

「斯謂之仁矣乎」、皇本「斯」の下に「可」字有り。「矣乎」の上に「已」字有り。

注の「訥難也。牛宋人。弟子司馬犁」。

「正義」に曰く、「説文」(言部)に、「訥は頓なり」と。頓は鈍

と同じ。此に難と訓ずるは、引伸の義なり。『荀子』「正名篇」に、「是を外にする者は、之を訥と謂ふ」と。楊倞注に、「訥は難なり」と(正義原文は、荀子原文及び楊倞注の「訥」字を「認」に作る)。認は訥に同じ。

犁は宋の桓魋の弟爲り。故に宋人と言ふ。『史記』「仲尼弟子傳」に、「司馬耕、字は子牛」と。是れ牛は、耕を名として、犁を名とせず。此の注何に本づくかを知らず。

注の「行仁難。言仁亦不得不難」。

「正義」に曰く、此れ「言」を以て「仁を言ふ」と爲せば、則ち上文の「其の言や訥」とは、仁者は輕がるしく仁を言はざるを謂ふなり。

皇疏 江熙を引きて曰く、「禮記」(表記)に云ふ、「仁の器爲るや重し。其の道爲るや遠し。擧ぐる者能く勝ふる莫く、行ふ者能く致す莫きなり。仁に勉むるは、亦た難からずや」と。夫れ易く仁を言ふ者は之を行はざる者なり。仁を行ひて、然る後仁に勉むるは難きこと爲るを知る。故に敢て輕がるしく言はざるなり」と。

案ずるに、此の注亦た通ず。

\* 包慎言「温故録」は見見。

## 第四章

〔論語本文〕司馬牛問君子。子曰、君子不憂不懼。

〔何晏・劉寶楠解〕司馬牛 君子を問ふ。子曰く、君子は憂へず懼

れず。

〔注〕孔曰く、牛の兄の桓魋、將に亂を爲さんとす。牛 未より來たりて學ぶに、常に憂へ懼る。故に孔子之を解めんなぐとするなり。

〔論語本文〕曰、不憂不懼、斯謂之君子已乎。子曰、内省不疚、夫何憂何懼。

〔何晏・劉寶楠解〕曰く、憂へず懼れず、斯れ之を君子と謂ふか。

子曰く、内に省みて疚しからざれば、夫れ何をか憂へ何をか懼れん。

〔注〕包（咸）曰く、疚は病なり。自ら省みて罪惡 無くんば、憂へ懼るべき無し。

〔正義〕に曰く、皇本、「斯可謂君子已乎」に作る。

注の「牛兄」より「解之」に至るまで。

〔正義〕に曰く、「憂へず懼れず」とは、即ち仁者は憂へず、勇者は懼れざるの義なり（「子罕」・「憲問」）。注に「牛 憂へ懼るるに、夫子 憂へず懼れざるを以て之を解めん」と謂ふは、夫れ桓魋亂を謀り、覆宗絶世の禍有り。牛之が弟爲り。豈に漠然として心を動かす無きを得んや。

〔孟子〕（「告子」下）に謂ふ、「越人 弓を關きて我を射んとせば、我談笑して之を道びく。其の兄 弓を關きて我を射んとせば、則ち己 涕泣を垂らして之を道びく」と。此くの如くんば、乃ち親に親しむと爲す。乃ち仁爲り。

今 牛は兄の亂を爲すに因りて、常に憂懼を致す。乃ち人倫の變、人情の萬已む能はざる所の者なり。而るに夫子 解むるに「憂へず懼れざる」を以てするは、是れ牛に教へて越人に待する者を以て兄に待せしむるなり。義に悖り教を傷り、遠く此の經の旨を失す。

「宋より來たりて學ぶ」と云ふは、桓魋の未だ亂を爲さず、司馬牛來たりて夫子に學ぶ時に據るなり。

注の「疾病也」。

「正義」に曰く、「疾は病なり」とは、『爾雅』「釋詁」の文なり。『禮(記)』「中庸」に云ふ、「故に君子内に省みて疾しからざれば、志を惡むこと無し。君子の及ぶべからざる所の者は、其れ惟だ人の見ざる所か」と。(「中庸」鄭注に、「疾は病なり。君子自ら省みて、身に愆病無きなり」と。